

■ 特定課題セッションⅣ 報告

「社会福祉士新カリキュラムにおける実習プログラミングの課題と展望」

コーディネーター：川島 恵美（関西学院大学）

本課題セッションにおいては、社会福祉士新カリキュラムにおける実習プログラミングについて、養成校・実習生・実習先の三者が協働し、それぞれにメリットのある展開をはかるために必要な課題について、現場でかかわる実習指導者と養成校の教員が率直な意見交換を行うことを意図して企画された。この意図を汲んで以下の通り4題の報告が行われた。

①高杉会員：教員と実習担当者による研究グループにおけるフォーカスグループディスカッションの質的な分析によって抽出された実習教育内容と、実習評価項目の精査という2点からジェネラリストソーシャルワーカー養成に必要な実習のミニマムスタンダード設定に向けた課題についての報告が行われた。

②中島会員・廣瀬会員：母子生活支援施設におけるモデル実習プログラムの創出において、現場との協働による具体的なプロセスがどのような展開によっておこなわれたかの報告があり、プログラミングを通して全職員がソーシャルワークの視点を共通認識し、行動の理論化の重要性を意識するなど施設機能にとってメリットが生まれるが、そのためには実習先のマネジメント能力が不可欠であるということが示唆された。

③都村会員：2年半の期間で実施されている「実習教育モデル研究会」において、実習担当教員と現場指導者との連携によって作成されたパイロットプログラムとその評価についての経過報告が行われ、今後はプログラミングのみならず、現場における「実習マネジメント」に関する要綱についても現場との協働によって作成することが必要であるとの課題が挙げられた。

④坪内会員：実習日誌の指導者のコメント内容についてのGTAによる質的分析の結果、「役割認識に基づく指導言語の表出」というコア・カテゴリー、「個への着目」と「場の提供への着目」という2つのサブカテゴリーが生成され、実習プログラミングでは、学生は自己課題を明確にできるように事前指導を徹底し、実習指導者は学生の個別性に着目しつつ内容に関連性を持たせ、学生と共有しながら継続的なスーパービジョンが行えるように職員間の連携を強化すること、それは組織全体の人材養成の課題でもあるとの報告がなされた。

以上の報告を受けて、フロアの参加者も交えて行われたディスカッションでは、実際に現場との協働によって効果的なプログラミングの試みが行われていることに対して、今後現場とタッグを組んで実習を行っていくことが、現場でのソーシャルワークの展開に有意義な影響をもたらす可能性への期待と同時に、

必ずしも全ての実習先で同じことができるとは限らないという限界についても議論された。今回は、残念ながら現場の指導者の立場での参加者が少なかったがいずれにしても実習を受けていただく現場にとって、具体的なメリットが見え、一種インセンティブとして受け止められるように養成校側からも働きかける必要があるという合意が得られ、今後の実習教育の発展に対する期待感を得てセッションを終了することができた。